

ラウンドテーブル・2014

2015 . 3 . 22

生・労働・運動ネット

富山市神通町 3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

E-mail:jammers@net-jammers.net

# ニュースレター

「ラウンドテーブル・2014」第10回:

「敗戦／戦後70年」は私・たちの〈問い〉か その3

「『敗戦／戦後70年』?!——小さきものの声／聞き  
取れぬほどの微かな声／ついに発せられなかった  
〈声〉の行方を探る」(2/11)での論議から

今年2015年は、日本の「敗戦／戦後」からちょうど70年目に当たります。「ラウンドテーブル・2014——『生』の〈註〉を行き交わす」の後半の「『敗戦／戦後70年』は私・たちの〈問い〉か」では、この国の政治・社会システムの成立・「構成」を根底から捉えなおすことを通じて、日本の「構成」的解体への道筋を探ることを試みています。

2月11日、「ラウンドテーブル・2014」の第10回「『敗戦／戦後70年』は私・たちの〈問い〉か——その3」の集いを、「憲法フェスタ・2015」の参加企画として、表記のようなタイトルで行いました。「その3」の集いでは、主に報告やディスカッションを軸に進めてきたこれまでの「ラウンドテーブル」とは異なり、映像や音楽等を素材として、「敗戦／戦後」をめぐる論議の中であまり取り上げられてこなかった〈問い〉を確かめ合うことを試みました(当日の映像や音楽については、この「ニュースレター」の終わりに収録したレジュメ参照)。

なお、「その3」の集いでは、そこで上映したNHKの教育テレビ「ハートネットTV」の「シリーズ戦後70年・第1部——障害者はどう生きてきたか」について、障害当事者の跡地宗一郎さんからコメントしてもらった上で、参加者同士で「フリートーク」を行いました。併せて、今回、紹介された映像や音楽について感想や意見の交換も行いました。以下、そこでの主な論議を紹介します。

## I . 「障害者解放」の視点から「自立と自己決定」を問う

- 跡地: 今日は、この「ハートネットTV」の番組の内容について障害者の立場から私の意見や感想を言って欲しいということだが、むしろ、自分としては、この場にいる人たちにいくつかの〈問い〉

を投げかけることをしてみたい。

この番組の最初の方で、戦時中、障害者が兵役からはずされたという話があったが、徴兵されて戦闘行為をすることの是非をひとまず置いて言えば、それは、やはり、障害者に対する差別や排除ということになるのではないか。

この番組の前に、強制的に施設に収容されたハンセン病の元患者の人が68年ぶりに生まれ故郷に帰るといふNHKのドキュメンタリー映像(「ハンセン病元患者68年ぶりの帰郷」)があった。これは非常に微妙な問題だと思うが、病気によって外観が大きく損なわれるという状態を見て周囲の人たちが恐れを感じたということが、実際の病気の感染力とは別に、ハンセン病の患者に対する排除・隔離を生み出したということがあるのではないか。自分としては、そのようなハンセン病に対する差別的な扱いを認めるわけではないが、ただ、そうした恐れを感情を抱くこと自体を禁じることは誰にもできない。そのような意味で、単に日本国家によるハンセン病患者の隔離政策を批判するだけでは、その問題の本質を捉える上で不十分なのではないだろうか。

今日の集いでは、靖国神社が出てくる映像も紹介されていたが、毎年、「終戦の日」に政府の閣僚がそこで戦没者への参拝を行うということがいつも問題になっている。しかし、日本のアジアへの侵略戦争を決して肯定しないという前提の上で言うのだが、否応なく徴兵されて国家のために死んだ名も無い一兵卒の人たちをそこで追悼するということ自体は、ありうることはないか。「靖国参拝は許されない」ということを結論としてすぐに言う前に、もっといろいろと論議することが必要ではないかと思う。

先ほどの「ハートネットTV」の番組に即して言えば、まず、気になるのは、そこに「ふくにゃん」というアニメの猫が出てきて、戦後70年の日本の福祉の流れを紹介するという構成になっていることだが、なぜ障害者自身ではなく、アニメの猫に日本の障害者運動を語らせるのかと思ってしまう。また、この番組では、脳性マヒ者の当事者グループの「青い芝の会」のメンバーが「私たちが殺すな！」というプラカードをもって抗議している場面が出てくる。自分が直接の当事者ではないからそう思うのかもしれないが、健常者の親が障害をもつ子どもを殺すというのではなく、もしもこれが逆に障害者が起こした事件であれば、そのことが起きるに至った背景をきちんと考慮すべきだという訴えになったのではないか。

この事件についていつも思うのだが、殺すまでに追い詰められる背景があるというのは、殺す側が健常者であるか障害者であるかに関わりなく、言わなければならないことのはずだ。しかし、「殺されたのが障害者だからといって刑を軽くするな」ということで厳正な判決を求めるといふのは、逆に自分自身に枠をはめるようなことになってしまうのではないか。一時期の「青い芝の会」が日本の障害者運動の中で画期的な動きを創り出したということは確かにあるが、それが脳性マヒ者以外の他の障害者グループとの連携や交流といった点で、どこまで自らの運動の殻を打ち破ることができたか、という問題は依然として残されているように思う。

- 今、言われた事件についてこの場にいる人の多くが知っているとは思いますが、1970年に横浜で脳性マヒの少女を母親がしめ殺すという出来事があり、それは日本の福祉の貧困によるものだとして当時のマスコミが同情的に報道したため、母親への減刑嘆願運動が起こっていた。そうした風潮に対して、「青い芝の会」は、それは障害の有無によって人間の価値を序列化すると同時に、母

親に同情する一方で障害者の命が奪われたことを軽視するものだとして異議申し立てを行ったのが、先ほどのプラカードだ。しかし、「ハートネットTV」の番組では、「青い芝の会」が車イスの乗客に対する乗車拒否に抗議してバスを占拠したことは紹介しているのに、その事件については何も説明がない。そこにまさにNHKの体質が現れているように思うが、障害者にとっての「敗戦／戦後70年」とは何であったのかを問うはずの番組で、「青い芝の会」がその事件について何を訴えたのかをまともに取り上げようとしていないことに、大きな違和感を感じる。

- 私もこの番組について同じようなことを思うし、そこにNHKに限らず、日本社会が障害者の運動を捉える見方の限界も現れているように感じている。ただ、「青い芝の会」の運動のことがそこでまがりなりにも取り上げられていることや、「戦傷障害者」への対策から始まった日本の戦後の障害者政策の流れが一通りたどられているということもあって、その番組を紹介した。むしろ、私が気になるのは、番組の最後に「私たち抜きに私たちのことを決めないで」というタイトルで国連の「障害者権利条約」のことが出てきて、それが昨年1月によく日本でも批准されてよかったという話になっていることだ。もちろん、それが批准されたこと自体に反対するわけではないが、そのように障害者の「自己決定」ということに焦点を当てて戦後の障害者運動の歩みを締めくくることで、論点が大きくずれてしまうのではないかと感じている。

1960年代末から70年代にかけて、「青い芝の会」のような障害者自身を当事者とする運動が登場してくるのだが、私の大まかなイメージで言うと、そうした運動の初発のモチーフというのは、障害者の「自立と解放」であったように思う。もちろん、日本の障害者運動では、障害者に対するあらゆる差別に反対するということが掲げ続けてきたのだが、ある段階から、「自立と解放」という障害者運動の理念が、「自立と自己決定」に変わってしまったように感じている。その場合、障害者の「解放」と「自己決定」とは、全く違うことではないか。2000年代に入って障害者の「自立支援」の名目で福祉サービスの利用者に対して「応分の負担」を求める「障害者自立支援法」が成立したのだが、すでにそれ以前から「自己決定」ということが支配の側の言葉になってしまった。

とりわけ、小泉内閣の成立以降、この国でもネオリベ的な経済・福祉政策が本格的に始まり、その流れが形を変えながら現在まで継続されている。その際に、例えば、「お前が低賃金で不安定な仕事にしか就けないのも、そういう生き方を選んだお前自身の『自己決定』だ」というような形で、「自己決定」ということがもちだされるようになっていく。また、2003年に現地の人々への支援活動のためにイラクを訪れた3人の日本人が武装グループに捕らわれた際に、「それは、そんな危険なところに行くのを自分で決めた人間の『自己責任』だ」という激しい人格攻撃が行われた。そのように、この間、「自己決定」という言葉は、「自己責任」という言葉と対になって、「自分で決めたことの結果だ」として困難に陥った人々に対して支援を行わないことを正当化するためのものとなっている。

- 私たちが「障害者解放」という言葉に始めて触れたときに、とても鮮烈な印象を受けたことを、今でもはっきりと憶えている。「障害者解放」というのは障害者が何から解放されることなのかという〈問い〉は、障害者運動にとって永遠の課題としてあるだろうが、そうしたストレートな問いかけを、当時の障害者運動は日本社会に向けて投げかけていたように思う。そのように、障害者への手当が多少増額されたり、単に福祉サービスのメニューの中のいくつかを利用者が選べるようになったりした

という程度のことで、本当に障害者が解放されたと言えるのかという〈問い〉は、現在もなお残り続けているのではないだろうか。現在の障害者運動の中で「障害者解放」という言葉は全く聞こえなくなっているが、障害者の「自立と解放」という理念が「自己決定」にすり替えられてしまったことで、残念ながら、日本の障害者運動は政府の障害者政策によって屈折を強いられてきたのではないかと思う。

先ほどの跡地さんのコメントに関連させて言えば、戦争中の障害者に対する扱いをどう捉えるかという問題は、そのことが障害者の「自立と解放」にとって何であるのかという視点から考えるべきではないか。そうした視点から言えば、障害者が兵役からはずされたのは障害者に対する差別や排除ではないかということではなく、むしろ、戦争は障害者を解放するのかという問題として問いを立てることが必要のように思う。さらに言えば、「障害者解放」とは、障害者が自らの障害から解放されることではなく、障害者を「障害者」というカテゴリーの中に囲い込み、障害者を差別・抑圧しながら存在させているこの世界のあり方から自分たちが解放されることなのではないのか。障害者自身が当事者となった運動が始めて登場したときに、そうした〈問い〉を社会に対して投げかけていたように感じている。当時の障害者運動は、そのように、人間を差別・抑圧するこの世界のあり方から全ての人がいかに解放されるかということの中に障害者の解放もあるはずだ、ということを訴えていたと思うが、それが障害者の「自立と自己決定」ということとの決定的な違いではないか。

そのような意味でも、「障害者解放」ということのインパクトや可能性は、現在もなお、充分には汲み尽くされていないように思う。

## II. 「敗戦／戦後70年」を新たに・改めて問う

### 1. 誰がどのように戦死者たちを追悼するのか

- 今日の集いの最初に見たドラマの「歸國(きこく)」では、大宮上等兵という人物の名前が何度か出ていたが、それについてもう少し補足してもらえれば、と思うのだが。
- 「歸國」というのは、元々2時間半もの長さのあるもので、2010年8月14日に倉本聰脚本の「終戦ドラマスペシャル」として放送されたものだが、今日は時間の都合からその最初と最後の方を抜き出してお見せした。見てお分かりのように、そのドラマは、戦死した日本兵の霊を乗せた臨時列車が深夜に現在の東京駅に到着して、始発列車が出るまでの短い間にそれぞれの日本兵の霊が自分の思いを残す人々を訪ねるという筋書きだが、その中で、ビートたけしが大宮上等兵という戦死した日本兵を演じている。年老いた彼の妹は大学教授をしている息子に施設に入れられるのだが、妹の息子が見舞いにも来ず、また、母親の死を悲しまないことに怒りを覚えて、生者に干渉しないという禁を破って大宮上等兵は彼を殺してしまう。そのように、そのドラマでは彼も含めて何人もの日本兵が登場して、日本の現在の姿を目撃することになる。

今日の集いで、深作欣二が監督した「軍旗はためく下に」という映画の予告編をお見せした。それについて少し補足すると、その映画の原作は結城昌治の同名の小説だが、夫がニューギニア戦

線で軍規違反の罪で処刑されたために遺族恩給を貰えない女性が夫の死の真相を知ろうとして当時の関係者を訪ね回るのだが、黒沢明監督の映画「羅生門」のように、それぞれの証言者ごとに言うことが違ってなかなか事実にとどり着けないというストーリーになっている。その映画の中で、作曲家の林光が「君が代」をアレンジしているのだが、それを探しているときに偶然見つけたのが、先ほどお聞かせした「日米友好！？星条旗よ永遠なる君が代」で、アメリカ国歌の「星条旗よ永遠なれ」のメロディーがいつの間にか「君が代」のメロディーとまざりあってしまうというものだ。それと併せて68年の「ウッドストック」で伝説的なギター奏者のジミー・ヘンドリックスがアメリカ国歌をパロディー化したものを紹介したが、よく聞くと、ギター演奏で投下されている爆弾の音や機関銃の連射音が入ったりしている。

- 「歸國」の中で、内閣の閣僚がマスコミにかぎ付けられるのを恐れて靖国神社を真夜中に参拝するという話を聞いて、日本兵たちの上官の将校が、「国に命じられて死んだ俺たちを弔うことが禁じられているというのか！」と叫ぶ場面があった。ドラマの中でその台詞を聞くと納得できなくはないのだが、戦地で日本軍が何をしたかを不問にして、「国のために死んだ人間はちゃんと国の責任で追悼すべきだ」ということになれば、結局、靖国神社の存在を肯定することになってしまうのではないかと。
- 今、言われたことは跡地さんのコメントと関連させて論じるべきことだと思うが、多くの論者が指摘しているように、靖国神社には、名もない兵士たちだけではなく、日本を戦争に引きずり込んだとして東京裁判で有罪判決を受けて処刑された「A級戦犯」の人たちもそこに合祀されていることが、問題を難しくしている。もちろん、それ以前に、自分の身内の戦死者たちを日本国家に弔ってもらうことが、本当に必要なのかという論議もあると思うが。
- 結局、今の話というのは、人々を兵士として戦地へ追いやった国家と戦死した兵士たちを弔う国家とは同じものなのかどうかということなのではないか。そこが曖昧にされているために、「敗戦／戦後」から70年経っても戦死した兵士たちを弔えないということになってしまっている。安倍は、戦前と戦後の日本が同じだと言いたいわけだが、「国威発揚」のために人間の命を平気で犠牲にするような戦前の日本国家のあり方をいかに断ち切るかということ抜きにして、「敗戦／戦後」を生きる私たちが戦死者を追悼することは本当はできないように思う。

## 2. 「戦後発生責任」をいかに問うのか

- 今日の集いのレジュメの最後の方に、「戦争責任」や「戦後責任」と並んで、「戦後発生責任」という言葉がある。私が思うには、「戦後発生責任」とは、「サンフランシスコ講和条約」の締結と同時に「在日」の人たちが日本国籍を失うというように、敗戦に伴って日本帝国が解体されたことから生じた問題を戦後ずっと放置してきたことに対する責任ということではないか。

今日紹介された映像の中に、映画監督の大島渚が製作した「忘れられた皇軍」というドキュメンタ

リーがあった。その映像にもあるように、生活の資を得るために「傷痍軍人」として駅前や街頭で物乞いをしていた人たちが、実は日本国籍がないために戦傷に対する補償金や軍事恩給を受給することができない在日朝鮮人の元日本兵であることを、つい最近知って驚いた。そのことは、まさに私たちの「戦後発生責任」そのものに関わることではないか。

今日のレジュメの別の箇所には、『『永続敗戦レジームの拒否』が叫ばれる』という言葉もある。白井聡の「永続敗戦論」という本では、「サンフランシスコ講和条約」の締結による日本の「主権回復」後も、日本国憲法や日本の国内法に制約されずにアメリカが日本の政治・経済システムをコントロールする一方で、そのことがこれまできちんと論議されてこなかったことを指摘している。しかし、「在日」の元日本兵の傷痍軍人のような問題は、アメリカやアメリカに自発的に隷従する日本の支配者層を悪者にするだけで済むことではなく、私たちが「敗戦／戦後」の時間の中でそのような人々の「声」をどこまで聞こうとしてきたか、また、私たちの生きるこの社会をどのように創り出そうとしてきたかということに深く関わる問題であるはずだ。そうした問題を抜きにして、「敗戦／戦後70年」を考えることはできないように思う。

- 「忘れられた皇軍」の中で、元日本兵の「在日」の人たちが、厚生省の窓口を訪ねれば、韓国代表部に行けと言われ、韓国代表部に行けば日本政府が補償すべきことだと言われて、たらい回しにされる場面がある。この映像が撮られたのは1963年で、1965年の「日韓条約」が結ばれる直前の時期だが、「日韓条約」で、韓国政府は日本の植民地支配に対する賠償要求を正式に放棄している。ただし、当時の韓国大統領は、現在の韓国大統領の父親の朴正熙(パク・チョンヒ)だったが、軍事独裁政権を率いていた彼は、そうした不平等な内容に対する韓国国内の反対の世論を封殺して同条約を成立させた。しかし、結局、そのように日本の植民地支配による被害に対する補償を求める「声」を無理に力で押しつぶしたとしても、韓国国内でもそのことへの疑問の声は再び上がってきているし、そのことは当然日本にも跳ね返ってきている。そのように、歴史上問われなかった〈問い〉は、必ず回帰せざるを得ないのだが、そうした〈問い〉をどうもち続けるかということに、それぞれの闘いがあるだろう。

なお、その映像と併せてお見せしたNHKのドキュメンタリー番組「原爆棄民～韓国人被爆者の65年」では、朝鮮半島から日本に動員されて広島で被曝し、韓国に戻ってから被曝による疾病に苦しむ人たちが日本政府に対して補償を求めていることを取り上げている。そのことについてもう少し補足すると、2013年10月、韓国人被爆者が国と大阪府を相手取って「被爆者援護法」に基づく医療費の支給を求めた裁判で、そのような日本国外の被爆者への補償を求める裁判として初めての勝利判決が大阪地裁で出されている。

- 私たちは、どうしても「敗戦」がそのまま戦争の終結だと考えてしまうのだが、先ほどの映像にあるように、元日本兵の「傷痍軍人」や韓国人被爆者のような人たちにとって、決して戦争は終わっていない。「敗戦／戦後」と呼ばれる時間の中で、そうした人たちにとって「戦争状態」が依然として続いていることの責任を私たちがどう果たすのかが、「戦後発生責任」ということの核心にあるのではないかと思う。

### 3. 敵を討つ「弾丸」としての歌は私たちにあるのか

- 今日の集いでは、1945年8月15日のいわゆる「玉音放送」（「終戦の詔勅」）の一部が流されたが、それを聞いて改めて思うのは、この国の「敗戦／戦後」と呼ばれる時間が、「朕ハココニ国体ヲ護持シエテ」という昭和天皇による「国体護持」宣言から始まっていることだ。その言葉に続けて、「総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ」、「世界ノ進運ニ後レザラムコトヲ期ス」とある。まさにそのように、「玉音放送」では、日本帝国による侵略戦争の被害者に対する謝罪の言葉が一言もないままで、「ポツダム宣言」の受諾がそのまま、敗戦後の新国家建設への期待へと接続されて、「爾（ナンジ）臣民ク朕ガ意ヲ体セヨ」、つまり、そうした天皇の意思を国民はしっかりと体現して努力せよ、という言葉で締めくくられている。難解な漢語だらけの「玉音放送」を当時の人々が聞いてもあまり理解できなかったと思うが、すでにそこに、「戦争責任」や「戦後発生責任」の問題を放置し、国家の総力を挙げて世界の趨勢に遅れを取らぬように成長路線を追求してきた戦後の日本のあり方が示唆されているように思う。
- 今日の集いでは、「乱調へ 乱調へ」というタイトルで、「玉音放送」と併せて先ほどの話に出てきたアメリカ国歌のパロディーなどの音楽と一緒に紹介されていたが、その中の「世界平和」という歌が私は特に気になっている。それを歌っているのは、「世界の終わり」という若い人たちから支持されているグループなのだが、その歌の中で「世界平和」という言葉をまるで吐き捨てるように歌っている。その歌の歌詞は、なかなか意味深長で、「世界平和」と言うときの「世界」の中に自分はいっていないと言ったり、「世界平和」を声高に唱える多数派の市民がはたして本当に正常なのかと言ったりしている。また、その歌の中に、「ニンゲンという怪物が『セカイ平和』という戦争を起こしている」という歌詞があるが、それはまさに、安倍が、「世界平和」への貢献を掲げて「集団的自衛権」や「改憲」に突き進もうとしていることと、そのまま、重なるもののように感じる。
- 日本の民主主義や平和意識が、極めて一国主義的で欺瞞的なものだという批判は昔からあったが、とりわけ、安倍の再登場以降、欺瞞的な平和からむき出しの戦争へと急速に転換しようとしているように見える。今日の集いの映像の中に、昨年1月の沖縄知事選挙で、現在の沖縄知事の翁長候補の支援集会に、俳優の菅原文太が応援に駆けつけたときのものがあった。その中で、彼は、自分が出演した「仁義なき戦い」の映画の中の「山守さん、弾丸（タマ）はまだ残っとるがよ」という有名な台詞を言った後で、それを「仲井真さん、弾丸はまだ残っとるがよ」と言い換えて、参加者の喝采を浴びていた。そうしたことで言えば、現在の私たちにとって、何が敵を討つ「弾丸」となるのかが切実に問われているのではないか。
- 私が思うには、闘いの中でみんなで歌える歌があるということが、敵を討つための強力な「弾丸」になるのではないかと思う。しかし、残念ながら、今、私たちは、安倍を前にしてどんな歌と一緒に歌えることができるのだろうかと思ってしまう。

これは、先ほど跡地さんが言ったことにも関わることだと思うが、富山でも以前、ハンセン病の元

患者の人を迎えて集会がもたれたのだが、その集会の最後に主催者の一人がみんなで文部省唱歌の「ふるさと」を歌おうと提案して、参加者全員で歌ったということがあった。私はその時、本当に居たたまれない気分だったが、集団内の結束がそのまま異質な存在への排除へと容易に転じるような、日本的な共同性から排除された人に向かって歌うための歌がよりによって「ふるさと」だというのは、あまりにも貧しいことだと思う。

ハンセン病患者への差別の問題を考えるときに、外観の美醜に対する自分の価値判断がどうであるかということが、最後には残るのではないかと思う。そのときに、自分は醜いものよりも美しいものの方を選んでしまうのではないかという危惧をいつも感じてしまうのだが、そのような意味で、差別の問題をどのように解くのかというのは、結局、人間の価値観の根底の部分をどのように変えることができるのかということのように思う。それはある意味ではとても苦しいことだが、そうした〈問い〉をぜひもち続けたいと思うし、それと同時に、人間を差別し、排除するような連中に対して、みんなで押しかけて抗議するようなときに、やはり、一緒に歌えるような歌があったらいいなと思う。

- 2011年3月11日の「東日本大震災」の後、NHKではずっと「花は咲く」という「震災復興ソング」を流しているが、最初、その歌を聴いたときには、何かもの悲しい歌だなというぐらいの印象だった。しかし、未だに多くの人々が仮設住宅での暮らしを強いられ、放射能汚染を避けて何十万人もの人たちが避難生活を送っているという現状に対して、そのように「今はつらくても、いつか花が咲く日が来る」といった「明日への希望」を謳う曲を絶えず流し続けることで、震災の被災者や原発事故の被害者を放置している現状への批判を封じようとしているとしか思えない。また、それが国民的な一体感の喚起を図るものだという点でも、先ほどから「ふるさと」の歌について言われている批判と同様のことを感じる。

- 「イスラム国」を名乗る武装集団に拘束されたフリージャーナリストの後藤健二さんの解放を求めて、1月末に首相官邸前に多くの人々が集まったのだが、その時の参加者が歌ったのも文部省唱歌の「ふるさと」だった。しかし、常に戦禍に苦しめられる現地の人々の視線から戦争を報道してきた後藤さんのために歌う歌が、「ふるさと」なのかとあってしまう。

ところで、先ほどの跡地さんの問いかけに私もきちんと答えたいと思って言うのだが、「国のために死んだ名もない兵士たちを靖国で追悼してもいいのではないか」というのは、考え方として違うのではないか。やはり、死んだ後まで国家に管理されるのかとあってしまうし、無理矢理に戦場に送って殺しながら、「英霊」として勝手に祀ることを認めるわけにはいかないという思いがある。

- **跡地：** 私としては、別に靖国で戦死者を追悼すべきだと言いたいわけではなく、そこで追悼するかしないかということ以上に論議が進まないことを何とかしたいと思ってもあって、先ほどのように言ってみた。

ところで、先日、用があつて福島に行ったのだが、そこで原発事故の被災者に会った。その人は、原発事故後、何度か東京での反原発集会にも出かけたのだが、そうした集会で「ノーモア・フクシマ！」というスローガンが叫ばれるのを聞いて、原発には反対だが、もう二度と反原発の集会には行きたくないと言っていた。そのように、「自分たちをフクシマと同じ目に合わせな」という訴え



は、はたしてそれでいいのかと思う。

今日、私の言ったことは誤解を招くようなところもあったかもしれないが、むしろ、少々乱暴ではあっても、今までの議論の枠を壊すような話が必要なのではないかと自分では考えている。

- 言うまでもなく、「二度と原発事故を繰り返さないために、全ての原発を永久に動かすな！」といったスローガンを掲げることは、決して間違っただけではないはずだ。ただ、その被災者の人の思いとしては、「ノーモア・フクシマ！」と言うときに、現にそこで多くの人々が大きな不安や苦勞を抱えながら生きていることがどこまで視野に入っているのか、むしろ、自分たちをいつの間にか切り捨てることになっていないか、ということだろうと思う。一方、そのように、「都会で反原発を唱える連中は私たちの苦勞が分かっているのか」という原発事故の被災者の思いは、インフラ整備の影で原発事故の存在自体を忘却しようとするかのような政府の「復興キャンペーン」に容易に絡め取られかねないものだ。今、言われたことを、現地の人々と都市で反原発を唱える人々との対立やすれちがいといった話で終わらせないためには、そうした分断を超える相互の対話や結合をどのように生み出すかが強く問われているように思う。

- 前回の「ラウンドテーブル」の集いでは、赤坂真理の著書の「愛と暴力の戦後とその後」を素材として論議を行ったが、その集いの中で、「英語で日常会話に多出するごく普通の語である」“people”という言葉が「民主主義の根幹をなす概念」であり、“people”とは「国民」とは異なり、それに先立つ個々の集合であり、時には国家と対立するような存在だと、赤坂真理が述べていることが紹介されていた。文部省唱歌の「ふるさと」ぐらいしかみんなと一緒に歌える歌がないということも、今の時代に相応しい歌がないという以前に、「国民」として一括りにされるのではない、そのような“people”の感覚を私たちがもてないでいることの現れではないか。それは、さらに言えば、結局、人種的・言語的・文化的に同一の「国民」であることしか、私たちが社会を共に構成するための「原理」をもっていないということでもあるだろう。同時に、そのことが、「敗戦／戦後」の時間の中で、日本の私たちが「戦後発生責任」を果たさずにきたことの根幹にあるのではないか。

そのような“people”の感覚の不在と対になって、私たちが無自覚なままで保ち続けているナショナルな意識を私たち自身がどのように解体するかということが、「敗戦／戦後70年」を問う際の大きなポイントとしてあるように思っている。

2015年2月11日  
生・労働・運動ネット

## 「ラウンドテーブル・2014」第10回・「憲法フェスタ」参加企画

### 「敗戦／戦後70年」は私・たちの〈問い〉か その3

#### 「『敗戦／戦後70年』！？」

小さきものの声／聞き取れぬほど微かな声／  
ついに発せられなかった声の行く方

はじめのはじめに

「建国記念の日」という時間に

「憲法フェスタ」という営みが行われる空間のなかで

「敗戦／戦後70年」とは何かという〈問い〉を

問うとはどういうことであるか？

その70年のなかで「小さき物の声／聞き取れぬほど微かな声／

ついに発せられなかった声」は どこへ行ったか という〈問い〉を

問うとはどういうことであるか？

#### はじめに

「敗戦／戦後70年」—「戦後レジームからの脱却」が唱えられる

「永続敗戦レジームの拒否」が叫ばれる

あの声・たちはどこへ行った？

あの小さきものの声／聞き取れぬ微かな声／

ついに発せられなかった〈声〉はどこへ行った？

「戦後レジームからの脱却」を唱える者たちの耳は

「永続敗戦レジームの拒否」を叫ぶ者たちの耳は

あの声・たちを聞(聴)いたか？聞(聴)いているか？

Part 1 TVドラマ・倉本聰「歸国」から YouTubeなど  
脚本:日本経済新聞社2010

Part 2 乱調へ 乱調へ

「1945年8月15日」の>声<から YouTube  
「日米友好!? 星条旗よ永遠なる君が代」 YouTube  
「The Star Spangled Banner」から YouTube Jimmy Hendrix Woodstock 1969  
映画予告編「軍旗はためく下に」から YouTube  
「世界平和」 YouTube

Part 3 ある〈記録と記憶〉群

「忘れられた皇軍」から YouTube 大島 渚 1963  
「軍旗はためく下に」から YouTube 深作欣二 1972  
「毎日新聞1984年8月,85年8月,86年8月、朝日新聞2004年3月、毎日新聞2005年8月」  
「原爆棄民～韓国人被爆者の65年」から YouTube 2010  
「“戦闘配置”されず～肢体不自由児たちの学童疎開」から YouTube 2013  
「ハンセン病元患者68年ぶりの帰郷」から YouTube 2008

Part 4 「シリーズ戦後70年・第1部—障害者はどう生きてきたか」2015  
コメント 跡地 宗一郎さん

おわりに 「弾丸は まだ残っとるがよ」

「夕陽に走れ」から YouTube ジョニー大倉(映画「総長の首」1979)  
「仁義なき戦い」から YouTube 菅原文太のセリフ  
菅原文太 沖縄での挨拶から YouTube 県知事選・応援の挨拶2014

おわりのおわりに

「陽ガ落ちルマデ マダ時ガアル」——ナニヲスルタメノ時ナノカ?

「弾丸ハ マダノコツルガヨ」——ナイヲノダレヲ撃ツ弾丸ナノカ?

「戦争責任」・「戦後責任」・「戦後発生責任」をはたさないで来た日本  
国家を そして 私たち自身を撃つこと——だが それはどうする  
ことであるのか?

この〈問い〉を問い続けること=敗戦/戦後70年に改めて・新たに〈問  
い〉をもちなおすこと——だが それは何をどのように〈問い〉とす  
ることであるか?

## ご案内

# ラウンドテーブル・2014 ——「生」の〈註〉を行き交わす

テーブルをかこもう できるなら丸いテーブルを  
共食するのもいい 腹が減っては戦はできぬ  
そして共謀しよう 共同の武器の制作について  
共同の武器 それは声の礫  
テーブルをかこもう できるなら丸いテーブルを  
その声の礫には 私・たちの生が孕む  
たくさんの〈註〉が詰まっている  
テーブルをかこもう せめて一つでも席をあけて  
ここに もはやいない者のために

## ラウンドテーブル・2014

### 第13回:「敗戦/戦後70年」は私・たちの〈問い〉か その6 「『戦後日本と脱植民地化回避』再考」

●4月26日(日) PM1:30~4:00  
サンフォルテ302号室

参加費+資料代 500円

2015年は、「敗戦/戦後」からちょうど70年目に当たります。「私・たちの〈問い〉としての『敗戦/戦後70年』」では、この国の政治・社会システムの成立・「構成」を根底から捉えなおすことを通じて、日本の「構成」的解体への道筋を手探りすることを試みます。ぜひ、ご参加ください。

主催: 生・労働・運動ネット 〒930-0009 富山市神通町3-5-3  
TEL: 076-441-7843 FAX: 076-444-6093  
URL: <http://net-jammers.net/> E-mail: [jammers@net-jammers.net](mailto:jammers@net-jammers.net)